

第3回夏休みにみんなで作る地域の安全安心マップコンテストの特徴

塚本 章宏*・村中 亮夫**・花岡 和聖**・吉越 昭久**、***

I. はじめに

近年、従来から継続的に実施されてきた防災・防犯対策としての、避難経路の確保や避難訓練、防犯パトロール、子ども見守り活動に加え、事故やケガ、犯罪、災害による危険性から住民生活を守る取り組みを地域住民と行政との協働により推進するセーフコミュニティ (SC: safe community) 活動など、地域の安全安心への関心が高まっている¹⁾。こうした活動を通して、多くの安全安心に関する情報が多く取得されるようになってきた。そして、これらの情報を犯罪や災害などのテーマで、地図上に整理・表示して発信する試みがなされてきている。具体的には、火山や水害の情報に焦点を当てた「ハザードマップ」や、地域の危険な場所を示した「防犯マップ」などをあげることができる²⁾。

しかし、こうしたハザードマップや防犯マップの欠点として、掲載する情報を詰め込み過ぎると情報が交錯するため、閲覧者にとって重要な情報を理解しにくくなる点があげられる。また、完成した地図を配布するだけで安心してしまいことや、配布だけでは年少者や老年者に対する効果が小さいことなども指摘されている³⁾。これらの問題点を克服するためには、地域の住民自身が実際に野外で地域の安全安心マップを作成することが、地域の安全安心への関心を高め、より正確な情報を把握することにつながると考えられる。

こうした問題関心から、立命館大学歴史都市防災研究センターでは、2007年度から小学生に地域の安全安心への関心を深めてもらうことを目的として、「地域の安全安心マップコンテスト」を実施してきた。本コンテストでは、小学生と保護者（ないしは地域の住民）と一緒に地域の安全安心について調べ、マップを作成する過程で地域の安全安心に関心を持ってもらうことを目的としている。社会的にも弱者である小学生と、保護者や担任の先

生といった地域の大人と一緒に地域の安全安心について考えることで、世代間で異なる視点を共有できる。こうした情報や認識の共有を通して、地域の防災力・防犯力の総合的な向上が期待される。そこで、当センターでは初心者でもマップ作成に参加しやすい企画としてコンテスト形式を採用し、子どもと大人が一緒になって地域の安全安心について考える機会を提供した。

本稿は、今年度開催された「第3回夏休みにみんなで作る地域の安全安心マップコンテスト」の成果と課題を整理し、特徴を考察したものである。

II. 企画の概要

1 課題内容

本コンテストでは、身近な地域の安全安心に関する地図を小学生と保護者（20歳以上の大人）に作成してもらった。地図作成のテーマ・対象地域の設定は、洪水や地震などの自然災害発生時の避難経路や通学路の交通安全、子どもと大人のそれぞれからみたヒヤリハットマップなど、地域の安全安心に関する内容の範囲内であれば自由とした。

地図の大きさは、基本的にA0 (841 mm × 1189 mm) 以内としたが、応募者の作成時における自由度を出来るだけ高めるために、A4用紙やA3用紙などを用いて作成したマップを模造紙にテープなどで留めたり冊子状でまとめたりする方法でも受け付けることとした。なお、安全安心マップの作成にあたり、募集要項中に参考書として『改訂版 地域安全マップ作成マニュアル』⁴⁾、『子どもの通学支援マップ』⁵⁾、『こども地震サバイバルマニュアル』⁶⁾を紹介している。

2 作品応募期間

応募期間は2009年8月26日（水）～9月11日（金）である。小学生と保護者が小学校の夏休み期間を利用して地図作成に取り組み、修正作業や発送のための便宜をはかるため、最終的な締め切り日を9月末の週末に設定した。

* 日本学術振興会・特別研究員

** 立命館大学文学部

*** 立命館大学歴史都市防災研究センター・副センター長

3 諸機関との連携

本コンテストでは、第2回までと異なり応募対象を日本国内に広げた。これまでの経緯をふまえ、特に京都市内の小学校に通学している小学生に関心を持ってもらえるよう、コカ・コーラウエスト株式会社、京都市教育委員会、京都府教育委員会、京都新聞社、(財)京都市景観・まちづくりセンター、京都市消防局、人文地理学会、立命館地理学会、NPO 災害から文化財を守る会の各機関より後援を得た。また、京都市内の全小学校や図書館、コミュニティセンター、公民館、カルチャーセンターなどに、企画の案内と募集要項を送付し広報依頼を行なった。さらに、京都市教育委員会生涯学習部が運営する「みやこ子ども土曜塾」の協力のもと、土曜塾のホームページや情報誌『GoGo 土曜塾』においてコンテストの情報を広報した⁷⁾。

III. 地域の安全安心マップコンテストの実施

1 審査委員会の設置

応募作品は文化遺産や防災まちづくり、地理情報に関する8名の専門家(第1表)によって構成される審査委員会において審査された。本審査委員会では、応募作品について、①文章・図表の表現、②目的・主題の明確さ、③独自性(オリジナリティ)、④全体の構成、⑤データの充足度の5項目(第2表)について、10点満点で審査が行われた。この審査結果をもとに、各応募作品の合計得点を集計し、高得点のものから順に、最優秀賞(センター長賞)1点、優秀賞1点、入選3点、佳作4点、努力賞1点が選定された(第3表)。合計得点が同点の場合は、再度審議を行なった上で順位を決定するものとした。

第1表 審査委員

氏名	所属	役職
土岐 憲三氏	立命館大学歴史都市防災研究センター	センター長
吉越 昭久氏	立命館大学歴史都市防災研究センター	副センター長
林 春男氏	京都大学防災研究所	教授
小林 正美氏	京都大学大学院地球環境学	教授
大窪 健之氏	立命館大学理工学部	教授
鐘ヶ江秀彦氏	立命館大学政策科学部	教授
益田 兼房氏	立命館大学歴史都市防災研究センター	特別招聘教授
矢野 桂司氏	立命館大学文学部	教授

第2表 審査内容

項目	ポイント
1. 文章・図表の表現	文章や地図、図表の表現が明確であり、分かりやすいかどうか。
2. 目的・主題の明確さ	目的・主題(テーマ)が明確なものとなっているか。
3. 独自性(オリジナリティ)	革新さ・アイデア性・作成にあたっての工夫が見られるか。
4. 全体の構成	文章や地図、図表のバランスが取れた作品であるかどうか。
5. データの充足度	十分な地域情報の収集がなされているか。

第3表 受賞作品

受賞内容	学年	応募形式	タイトル
最優秀賞	6年	個人	安井細道キケンマップ
優秀賞	2年	個人	牛ヶ瀬の町
入選	2年	個人	ぼくの住んでいる町の通学路
入選	4年	団体	上高野安全マップ
入選	1年	個人	京とぎょえん安心安全マップ
佳作	2年	個人	私の住んでいる町桂坂
佳作	6年	個人	安心安全マップ
佳作	3年	個人	私の安全安心マップ(通学路)
佳作	6年	個人	安井学区でおとしよりが歩くのに危ないところ
努力賞	3年	個人	さいがいそなえものたくさん! MAP

2 応募状況

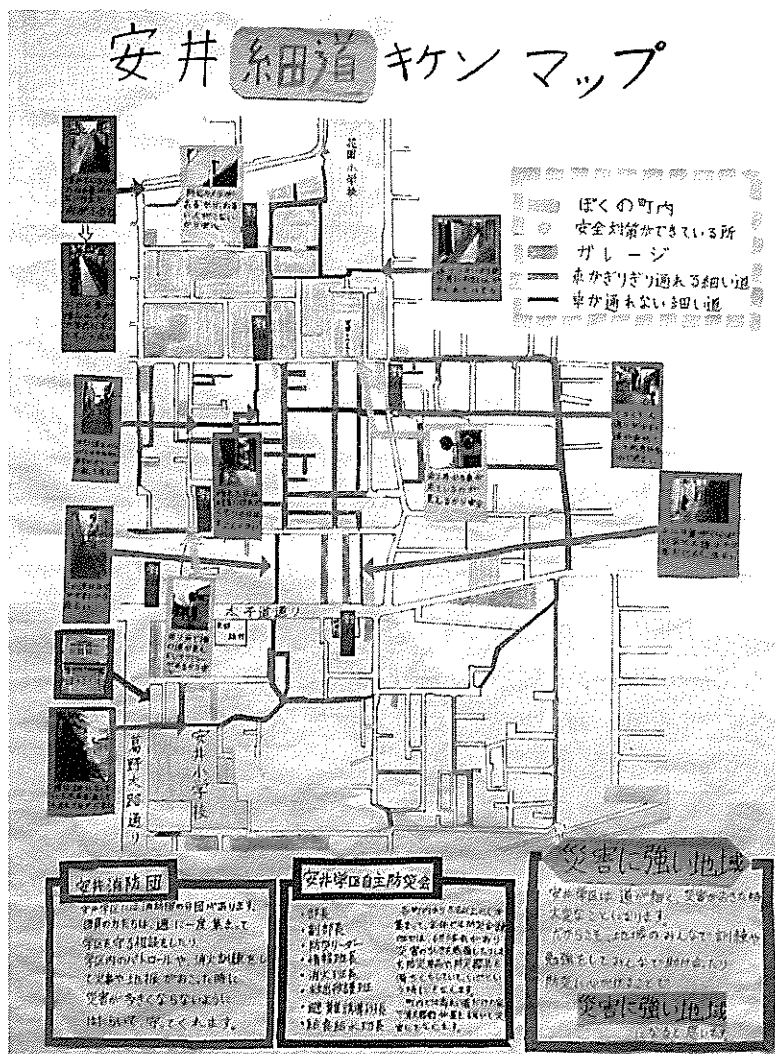
本コンテストには、京都市立安井小学校3件、京都市立上高野小学校1件、宮城教育大学附属小学校2件、立命館小学校4件の計10件の応募があった。

3 審査結果

2009年10月6日(火)に歴史都市防災研究センターにおいて審査委員8名による審査の結果、第3表に示した10作品に対して賞が授与された。最優秀賞は「安井細道キケンマップ」(第1図)を作成した安井小学校6年生の児童が受賞した。なお、当日の審査委員会において、今後の発展を期待するという意味を込めた賞として、最優秀賞、優秀賞、入選、佳作とは異なるカテゴリとして、努力賞を新設した。

4 表彰式・作品展示

審査を経て選定された作品については、2009年10月31日(土)の午後1時から、立命館大学歴史都市防災研究センターにて表彰式が行われ、受賞者らに表彰状および副賞として、センター長著書、後援先関連グッズが授



第1図 「最優秀賞」受賞作品

与された（第2図）。後援先グッズとしてコカ・コーラウエスト株式会社から折り畳み自転車やタオルなどが授与された。また、本コンテストの受賞作品は、歴史都市防災研究センターの1階展示ルームにおいて、2009年11月2日（月）～11月30日（月）の期間に一般公開された。

IV. コンテストの成果と課題

本コンテストは、今年度の実施で第3回を数える。ここに、本コンテストの成果をまとめ、今後の企画立案に活かすべく、成果と課題を整理・検討する。子どもの保護者に募集要項と同時に本コンテストに関わるアンケート調査票の提出を任意でお願いした。その結果をもとに、本コンテストの成果と課題を検討したい。

まず、安全安心マップ作成による地域の安全安心に対



第2図 表彰式の様子

する関心の高まりについて、5段階⁸⁾で評価してもらった。有効回答であった8名のうち「とても高まった」は75.0%（6名）、「やや高まった」は25.0%（2名）であっ

た。一方で、保護者から見て、安全安心マップ作成により子どもが地域の安全安心に対して関心が高くなったかを5段階⁹⁾で評価してもらった。有効回答8名のうち「とても思う」は75.0% (6名)、「やや思う」は25.0% (2名)であった。このように、安全安心マップ作成が、子ども・保護者にとって地域の安全安心に対する関心を高めることになったと評価できる。さらに、回答の記述内容を見ると、日常的な生活地域であるがゆえに見過ごしてしまった危険箇所や危険を回避するための消火器設置場所・避難場所などの再確認がなされ、日常とは異なる目線で地域を認識することで、地域の安全安心を考える機会を提供することにつながっている(第4表)。

このように、本コンテストにおいても、実際に地域を防災や防犯の視点で見て回り、安全安心の情報を地図化することが、地域の安全安心に対する関心を高めていることにつながっていると考えられる¹⁰⁾。先行研究では、防災マップ作成による防災に対する関心の高まりが、災害に対する被害軽減行動につながるとする知見¹¹⁾も得られている。実際、本コンテストにおけるマップ作成による被害軽減行動の効果として、子どもの事故や犯罪遭遇に対する注意喚起の行動(第4表中のNo.3)があげられる。また、安全安心マップ作成を保護者と子どもが一緒に行うことで、認識していた危険な場所の違いを再確認できたとする事例も多くみられた(第5表)。子どもが認識していない危険な場所(第5表中のNo.1・2)や、親が気づいていなかった子どもの認識や行動(第5表中のNo.3・4)を知ることにつながっているのである。

一方で、安全安心マップの作成に対する問題点についても2点指摘しておく必要がある。1点目は、作成者側が認識した危険や地物のみが地図化されるために、限定的な危険情報であるにも関わらず把握したつもりになってしまうことである。もう1点は、地図化することによって明確になってしまう危険な場所を不安視するものである(第6表)。

以上のように、安全安心マップの作成には意義と問題点の両面が存在する。しかしながら、こうした活動は継続的に行われることによって、より効果が発揮されると考えられる。作成した地図を日常的に更新することで情報の劣化を防ぎ、子どもと保護者の認識をすり合わせることで、課題を克服することができよう。安全安心マップ作成において、最も重要なことのひとつは、こうした経験を通して、普段の生活では得ることができない視点

第4表 安全安心マップを作成する意義

No.	記述内容
1.	親の目線で危険なところは、普段から注意するように言っていましたが、今回のマップ作成を通して一緒に再認識することができました。(30歳代・女性)
2.	危険についてあらかじめ考えることができる点が良い。(40歳代・女性)
3.	危険場所の再確認、消火器設置場所や理由、避難場所など認識で出来、家付近のことがよく分かって良かったのではないかと考えております。(40歳代・女性)
4.	子どもと一緒に自分の住んでいる町をゆっくりと歩いて探検し、ふだん気がつかなかったことに目を向けて話し合える時間を持つことが出来て、大変勉強になりました。(30歳代・女性)
5.	子どもとの再確認に良かった(40歳代・男性)
6.	お年寄りや障害者の目線になって地域を見てみることで、気持ちを理解しようと努力し、共に生活していこうと考える機会を持つことができたと思います。(30歳代・女性)

(注) 記述内容は、回答者本人の記述を忠実に反映している。

第5表 子どもと保護者との認識の違い

No.	記述内容
1.	京都御苑の中なら安心だと思っていたようですが、危険が多いと知りびっくりしていました。(40歳代・女性)
2.	私が危険と思っている場所がいくつかありましたが、子供はそれほど感じておらず、「こんなもんだ」と思い込んでいたこと。(40歳代・女性)
3.	子どもの視線で考えているなあと思うことが度々ありました。親ではそんなことまで…と思うことが、子どもには、何故こんなふうになっているのか常に疑問が出て、一緒に考えさせられました。(30歳代・女性)
4.	特に、「キケン」ヶ所と子ども110番の場所、又子供に毎朝あいさつをしている人と場所を教えられた。(40歳代・女性)

(注) 記述内容は、回答者本人の記述を忠実に反映している。

第6表 安全安心マップを作成する際の問題点

No.	記述内容
1.	見ている所(視点)が限定されてしまい、間違った安心感を持ってしまうことがある。(30歳代・女性)
2.	今回は、最寄駅までの通学路を書きました。今、物騒な世の中なので、あえて地図を書いてしまった事に、後でどうだったのだとうかと考えさせられました。(50歳代・男性)

(注) 記述内容は、回答者本人の記述を忠実に反映している。

が生まれることである。日常の行動に地域の安全安心に対する視点が生まれることで、地域の防災力・防犯力の総合的な向上が期待できるのである。

V. 結 論

本稿では、立命館大学歴史都市防災研究センター主催で実施された、「第3回 夏休みにみんなで作る地域の安全安心マップコンテスト」の企画・実施内容を紹介し、その成果と課題を考察した。その内容を、以下のようにまとめることができる。

- ①立命館大学歴史都市防災研究センター主催の「第3回夏休みに親子で作る地域の安全安心マップコンテスト」では、10件の応募が得られ、最優秀賞（センター長賞）1点、優秀賞1点、入選3点、佳作4点、努力賞1点が授与された。
- ②本コンテスト応募者の保護者に対して行なったアンケート調査からは、安全安心マップコンテストでのマップ作成により、子ども・保護者の持つ地域の安全安心に対する関心が高まったことが伺えた。この知見は、安全安心マップを作成することで地域の安全安心に対する関心が高まるとする既往研究に対応していた。
- ③安全安心マップ作成で得られる意義も重要であるが、問題点も指摘された。マップの作成によって、偏った情報に安心してしまうことや危険個所が明確になってしまうという懸念である。こうした問題意識や価値観が存在することを事実として受け止め、地域住民が情報の共有を進め、互いに補い合うことで解決に向かっていくものと考えられる。

本コンテストは、地域の安全安心に対する関心を促す「きっかけ」としての役割を担っていることがわかる。こうした活動を継続的に進めていくことは、より良い地域社会を構築していく一助になると考えられる。

【付記】本事業は立命館大学歴史都市防災研究センター主催の事業として、文部科学省学術フロンティア推進事業「文化遺産と芸術作品を自然災害から防御するための学理的構築」（代表：土岐憲三）に基づく支援を受けた。

注

- 1) たとえば、宮城県名取市本町の「防災マップ」や世界保健機関（WHO）により日本初のセーフコミュニティに認証された京都府亀岡市の取り組みなどがある。亀岡市ホームページ「篠町で安全地域魅力マップ『篠町S・MAP』作成活動を実施」URL: <http://www.city.kameoka.kyoto.jp/> (2009年12月20日閲覧)
- 2) たとえば、以下のホームページや成果などがある。①京都府警察本部「京都の犯罪情勢」<http://www.pref.kyoto.jp/fukei/> 2009年12月20日検索、②立命館大学歴史都市防災研究センター「歴史都市京都の安心安全3Dマップ」<http://www3.rits-dmuch.jp/ritsumeikyoto/> (2009年12月20日閲覧)、③関西国際大学現代GPプロジェクト「安心・安全まちづくり」（桐生正幸）『三木市における「地域安心安全」MAP』
- 3) ①塚本 哲・楨田祐子「火山ハザードマップの現状と要望」、地理48-9、2003、11～17頁。②伊藤和明「火山防災マップをどう生かすか」、自然災害科学17-3、1998、195～196頁。
- 4) 小宮信夫『改訂版 地域安全マップ作成マニュアル』、東京法令出版、2005。
- 5) 横矢真理「子どもの通学支援マップ」、岩崎書店、2006。
- 6) 国崎信江「こども地震サバイバルマニュアル」、ポプラ社、2006。
- 7) 京都市教育委員会生涯学習部みやこ子ども土曜塾推進担当「みやこ子ども土曜塾」<http://www.doyo-juku.com/> (2009年12月20日閲覧)。
- 8) 選択肢は「とても高まった」、「やや高まった」、「どちらでもない」、「あまり高まらなかった」、「全く高まらなかった」の5件法による。
- 9) 選択肢は「とても思う」、「やや思う」、「どちらでもない」、「あまり思わない」、「全く思わない」の5件法による。
- 10) 小関勇次「防災マップと防犯マップの作成」、地理49-5、2004、49～52頁。
- 11) 里村 亮「仙台市における町内会防災マップの作成と住民の被害軽減行動への効果」、季刊地理学58、2006、19～29頁。